常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年７月２２日(水)号

◇ 前向きさを生み出すもの と その支え

２１日の月曜日は、地から湧き上がってくる熱気が夕方まで続き、真夏の到来を感じさせる天候であった。本来であれば、この２１日で１学期を締めくくり、暑さを感じながら、さぁ夏休みというところであるが、今年はそうもいかない。

致し方がないとはいえ、子供、教職員とも、さぞテンションが下がっているだろうと心配したが、担任は授業履修等のさまざまな学級案件に思料し、そんなことを考えている暇はないと言う。　いや、そうではない。

実際にはどうかというと、口をぎゅっと固く結び、敢えて気持ちを高める努力をしている。己を奮い立たせる言動や行動を取らせる根源は、目の前にいる子供たちの存在であるのは間違いない。

６月１日の学校再開前に心配していたとおり、学校では、最も子供と接する場面の多い担任の先生たちに大きな負担がのしかかっているのが現状である。
しかし、本校の担任は、忙しさを表に出さない。特に子供の前では、絶対に忙しさによる苛立った感情を表に出さない。本当の強さを備えている。プロである。

さて、子どもたちはどうかというと、やっとエンジンがかかってきたという感じである。担任の先生との信頼関係も深まり、通常ならば６月頭の状態。アポロなら、一段目のロケットを切り離し、二段目のロケットに再点火して月に向かって、いざ大気圏突入。勢いがついた状態で、学びや諸活動に深まりが出てきた。

学習については、教員間の連携と工夫した手だてにより、どの学年も年度内には全ての学習内容が履修できるように進められている。順調というよりも、修正計画どおりと言った方が正しいだろう。各担任が１年間の学習計画を見直して自分なりに年間指導計画を再計画し、授業を進めている。

あたりまえと言われればそうかもしれないが、教師たちも体験していない未知の作業であるから、大変さは極まりない。さらに、中学校の教師であれば担当する専門教科のみであるが、小学校は全教科である。やることは山ほどある。
加えて、２年生から６年生は、前年度の未履修部分の履修対応もしてきた。

それでも、教職を生業に選んだからには、やり抜くしかないし、やり切るしかない。これまでも、保護者や地域の方の理解が、強力な後押しとなってきた。
様々な面でご不便をかけている保護者の皆様のご理解を、改めてお願いしたい。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年７月３１日(金)号

◇ 筆記用具考察

今日で７月も終わり。１学期も、残すところ、あと一週間となった。新型コロナ感染拡大の心配は尽きないが、子供たちも、職員も、よく頑張っている。

小学校の学びはとてもよい。
担任の先生から見れば全く普通のことかもしれないが、中学校ばかり勤務してきた自分にとっては、その景色が新鮮で、とてもいいなぁと感じることがある。
鉛筆である。　〇をつけたり、線を引いたりするのは赤鉛筆。　実によい。

中学生が学習時に使用する主な筆記用具はノック式ペンシル。いわゆる「シャープ」「シャーペン」だ。　〇付けをするのは赤インクのボールペンやサインペン。

では、なぜ、小学生にとって鉛筆が適しているのか。　理由はいくつもある。

文字を書くのに大切なのは筆圧である。
止めたり、払ったり、はねたり、ぐいと伸ばしたり、点を打ったり…
文字を書くには、様々な技術的要素が必要であるが、これを可能とするのが適切な筆圧であり、筆圧を感じながら文字を書くには、鉛筆が最良なのである。

また、持ち手の部分の材質がよい。ほとんのどの鉛筆が、適度な硬さと柔らかさを兼ね備えもつ木材である。長く使用する際は、痛みや疲れを和らげる。

問題は、鉛筆の持ち方である。正しい持ち方が疲れや痛みを軽減し、適度な筆圧をかける。つまり、正しい持ち方が、手に余分な負担を掛けず、美しい文字を書くことを可能にするのだ。
持ち方は気にせず、文字が書ければそれでよい…というものではないのである。

教室の全面。黒板の上方には、子供たちからよく見えるように、どの教室にも「正しい鉛筆の持ち方」の掲示が掲げてある。　いつでも確認できる環境にある。

それでは実際の持ち方はどうかと言えば、改善の余地のある児童もいる。
「鉛筆を持ってみて」と改めて鉛筆を持たせると、これがちゃんとできるのだ。

『鉄は、熱いうちに打て』
熱があるうちの方が成形も可能で、鉄を鍛えられるということ。
人も同じ。　今が大事なのである。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年８月７日(金)号

◇ 慮る（おもんぱかる・おもんばかる）

　１学期を無事に締めくくることができました。これもひとえに、保護者の皆様、様々な形で学校を支えてくださる地域の皆様のおかげと、感謝申し上げます。
　ありがとうございました。　今後とも、ご支援のほど、宜しくお願いします。

　８月に入り、体育館裏の常東ランドの森の音色が変わった。賑やかだ。
鶯（ウグイス）をはじめとする山鳥に代わり、蝉が主役の座をつかんだ。
　時間によって声色も変わる。朝昼のツクツクボウシやアブラゼミが元気いっぱいに奏でる蝉の声は、夕方になると様相を変える。　カナカナカナカナ…
　蜩（ひぐらし）だろうか、暮れなずむ景色と相まって、実に趣深い。
　何より、蝉の世界でしっかり住み分けができていることに驚いた。

　さて、７月末の会議の中で、資料を用いて教員としての心構えを再確認した。
　その際に扱った毛涯章平(けがい　しょうへい)の資料「教師十戒」を紹介する。

一、　子どもをこばかにするな。　教師は無意識のうちに子どもを目下のものと見てしまう。子どもは一個の人格として対等である。
二、　規則や権威で、子どもを四方から塞いでしまうな。　必ず一方を開けてやれ。さもないと、子どもの心が窒息し、枯渇する。
三、　近くにきて、自分を取り巻く子たちの、その輪の外にいる子に目を向けてやれ。
四、　ほめることばも、しかることばも、真の「愛語」であれ。愛語は、必ず子どもの心にしみる。
五、　暇をつくって、子どもと遊んでやれ。　そこに、本当の子どもが見えてくる。
六、　成果を急ぐな。　裏切られても、なお、信じて待て。　教育は根くらべである。
七、　教師の力以上には、子どもは伸びない。　精進をおこたるな。
八、　教師は「清明」の心を失うな。　ときには、ほっとする笑いと、安堵の気持ちをおこさせる心やりを忘れるな。　不機嫌、無愛想は、子どもの心を暗くする。
九、　子どもに、素直にあやまれる教師であれ。　過ちは、こちらにもある。
十、　外傷は赤チンで治る。　教師の与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。

　長野県に受け継がれる「信州教育の教え」の一つである。私が校長を拝命した際も、教育長より『教師十戒の「教師」を「校長」に、「子ども」を「教職員」に代えて職務にあたりなさい』と教えを受けた。岡崎の教育現場でも、先人から脈々と伝授され、岡崎の教育を側面から支えている。
　教育長の講話で気づいたことがある。教師十戒の「教師」や「子ども」は、他の立場にも置き換えられるということである。　大切なのは、相手を慮ること。

　常東ランドのように、さりげなく相手に配慮できる関係でありたいものである。

ひとつの関係

宇佐美百合子

一方(いっぽう)が傷(きず)つけば、もう一方(いっぽう)に響(ひび)く。
それが「ひとつ」ということ。

だから、
釘(くぎ)を打(う)とうとして、げんのうを握(にぎ)った右手(みぎて)が
誤(あやま)って左手(ひだりて)の指(ゆび)をたたいても、

右手(みぎて)は左手(ひだりて)に「ぼやぼやするな」って怒(おこ)らないし、
左手(ひだりて)は右手(みぎて)のことを「何(なに)するんだ」って責(せ)めない。

それどころか
右手(みぎて)はすぐにげんのうを放(ほう)り出(だ)して、
痛(いた)んだ左手(ひだりて)の指(ゆび)をそっといたわる。

それは、
左手(ひだりて)と右手(みぎて)が、もともと「ひとつ」だから。

すべての関係(かんけい)が
右手(みぎて)と左手(ひだりて)のように「ひとつ」に。 ※げんのう:「かなづち」のこと

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年８月２８日(金)号

◇　「聴く」ということ

先日のことである。ふと肩を見ると、小さな尺取虫がゆっくり歩を進めていた。目にするのは実に久しぶり。子供の頃に見て以来だ。突然、目に飛び込んできたその姿にびっくりしたが、尺取虫の巧みでテンポのよい体の動きに引き込まれ、しばらく目で追った。すぐさま校長室に戻り、そのままパソコンに向かった。

さて、８月上旬に比べると暑さは若干和らいだものの、体育館裏の常東ランドは、早朝からツクツクボウシの蝉の声真っ盛りである。山全体のあちらこちらから聞こえてくる蝉の声。その全体の音を聞いているのではなく、一匹のツクツクボウシの鳴き声に耳を傾け、追い続けていることに気づく。蝉との距離の遠近、蝉の鳴き声の大小、耳に入る鳴き声の波長など、それぞれが少しずつ異なる声色を聞き分け、一匹の鳴き声をちゃんと追える。これは、耳に入ってくる音をぼんやり【聞】いているのではなく、耳を傾けて【聴】いているからできるのだ。

２つの漢字を分解してみよう。共通点は【聞】と【聴】に「耳」があること。「耳」は漢字の意味を表す「意符」で、いずれも会意文字であることが分かる。

それでは、【聴】についての分析　その①。
【聞】との違いは【聴】には【心】があること。つまり、心に残しながら、心に留め置きながら、心に響かせながら【きく】とも捉えられる。さらに心の上には十四があり、【十四の心】で耳を通して【きく】のが【聴】。
「十四の心を考えなさい」と、高校時代に現代国語教師のネタ話で話をきいた。話が自分の記憶に残っているということは、この時、傾【聴】していたのだろう。

その②。
十四の四を 90 度回転させると目になる。十は加算記号のプラスと読み解く。「【耳】できくとともに【目】から入る情報と併せて（プラスして）【心】に残してきく」。つまり、「【目】と【耳】と【心】できくのが【聴】」なのである。「授業の先生の話を意識して聴きなさい」これは、担任時代に生徒たちに伝えてきた話。あまりに力技で、今となっては、こっ恥ずかしい。努力する立場が逆なのである。

入ってくる音や話を【聞】いたことは、メモに残すなどの作業が加わらないと忘れてしまうことが多いのに対し、【聴】いたことは忘れない。心の有無の差。
人間は、心が動いたときでないと行動に表出しない。本気で動かない。だからこそ、タイムリーな心に沁み入る話で子供たちの心を豊かに醸成しつつ、発見や感動、驚嘆、楽しさに満ちた授業で子供の学びを支援していく必要があるのだ。

ちなみに尺取虫は、人が指で距離を測るように「動きで距離を測る虫」が名前の由来。英語では「インチ（長さの単位）ワーム」。別の言語圏において同様の考え方で命名されているのだ。「なるほど、納得」と心を動かされた。もう忘れまい。

それにしても、尺取虫の成虫が空を舞う蛾とは。外見も動きも大変身である。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年９月４日(金)号

◇ 120 年記念式典に向けて

11 月 15 日（日）に開催する「常磐東小学校創立 120 年記念式典ならびに新築移転 34 年記念行事」に向けての準備が、同窓会をはじめとする実行委員各位の主導のもと、粛々と進行中である。学校のための最大限のご尽力に感謝である。

さて、新型コロナウイルス感染拡大が懸念される中であるが、実行委員会で中止や延期等も含めて開催に関わる協議を重ね、出来得る限りの対策を講じて縮小規模開催の方向で決議決定されたのには、様々な理由がある。

① 組織立ち上げは平成 28 年。足掛け５年に渡り計画的に準備を行ってきた。
② 当初、2020 年は東京五輪開催年。同時並行開催により、記録にも、記憶にも残る式典にしようとした開催日程の意図。また、2020 は「20」が重なり、120 年の「20」と数字的なつながりがある。
③ 記念行事の目玉が、記念品「常東ふるさとかるた」で、式典後、常磐東学区全戸に配付する。式典の延期等で配付を先延ばししてしまうことで、かるたの鮮度やタイムリー性が薄れる。
※記念かるたは、平成 30 年度当時の５年生児童（現常磐中学校１年生）の「楽しみながら常磐東学区のよさを伝えることができるかるたを作りたい」との声からプロジェクトが開始した。
◆「読み札」：平成 30 年度の全校児童からの応募および学区の方の協力
◆「絵　札」：平成 30 年度の全校児童（現３年生～６年生・中１・中２）
◆「オリジナルキャラクター作成」：現６年生
④ 記念行事に企画したアトラクションは「同窓生による記念講演」「光ケ丘女子高校ダンス部の演舞」「本校児童の鼓笛演奏」の３つ。密を避け、飛沫を防ぐために全てのアトラクションの中止も検討されたが、式典会場を体育館から屋外のテラス（児童昇降口前）に変更することで、鼓笛演奏のみ実施する。

開催の最も大きな理由が「児童がかかわっている」③である。記念式典自体は大人の問題であるが、主体となる③に加えて④もあることから、本式典においては、他の式典に比べて子供色が色濃い。様々な観点から、開催についてのご意見はあるかとは思うが、この点をご理解願いたい。

なお、式典当日は授業参観も同時開催する。保護者の方においては、本年度は WEB 開催となる「おかざきっ子展」の作品を展示するので、是非ご覧願いたい。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年９月１１日(金)号

◇ 求めて　はげむ①　【常磐東小学校　校訓】

正門をくぐり、斜め上前方に視線を移す。30 段弱の階段の最上段にあるのは、石板の黒御影石に白文字で刻まれた本校の校訓【求めて　はげむ】。

児童が登校してくるときは階段を上るために足元を確認しなければならないが、最上段まで階段を上れば、自然に目に映る絶妙な場所に位置している。しかし、さみしいことに、児童たちはほとんど気にかけていない様子。

校訓の横を抜けて正面玄関を過ぎ、本校本館をぐるりと左手に曲がる。するとそこにも、石板の黒御影石に白文字で刻まれた本校の校訓【求めて　はげむ】が迎えてくれる。児童は、２度目の校訓を抜けて昇降口へと向かっていく。
児童は登校時に２回、下校時に２回、一日で計４回、校訓を目にしている。

校門前方にある校訓は、平成５年度の６年生から贈られた卒業記念品。すでに２７年が経過し、刻まれた文字の白塗装はわずかに残るのみとなった。

児童昇降口横の校訓は、同窓会発会記念として昭和 47 年に建立されたもので、安戸の旧校地から移設されたものである。こちらは黒御影石に文字が刻まれたのみで、塗装のないタイプ。影の陰影で表現している。そして２つに共通するのは書体で、時代をまたいで受け継がれたと考えてよいだろう。
つまり、２つの校訓【求めて　はげむ】に、新旧同窓生の思いが宿るのだ。

児童は校訓にそれほど強い思いはないのかもしれないが、受け継がれ、学校に宿る魂は、きちんと子供の中で温められているようだ。
例を挙げれば、掃除の取組である。以前に伝えた４年から６年生の草取りを行う姿については記載したとおりであるが、下級生も負けてはいない。担任の指導もあるが､｢清掃をしっかり行うのはあたりまえ｣という空気が学校に流れている。取組が空気を作り、生み出された空気が、さらに取組の密度を濃くする。つながる取組。つながる空気。掃除に対して【求めて　はげむ】ことができている。

ほかにも５年生の様子を紹介したい。理科の授業と総合的な学習の時間をクロスカリキュラムで行い、ギョギョランド（校地内の人工池）の生態を観察するのと並行して池を清掃してくれている。その取り組む姿が、まさに【はげむ】。さらに、ギョギョランドのために池看板の再塗装や破損した池淵の修繕の声が上がったという。【はげむ】から、次に【求める】ものが見え、意欲が高まるのだ。

つながる意欲、連なる意欲。まさにこれが【求めて　はげむ】なのである。

子供
求めて
はげむ

求めて
はげむ

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年９月１８日(金)号

◇ 求めて　はげむ❷　【常磐東小学校　校訓】

校内にある２枚の石板校訓【求めて　はげむ】。

１枚は、校門階段上方にある平成４年度の６年生から贈られた卒業記念品。もう１枚は、児童昇降口横にある昭和 47 年建立の同窓会発会記念石碑。両者に共通するのは、黒御影石に刻まれた書体で、時代をまたいで受け継がれたと考えられえる。２つの石板校訓【求めて　はげむ】に、新旧同窓生の思いが宿るのだ。

前号でも触れたが、校風は受け継がれているのに、児童が校訓を気にかけていないのはあまりにさみしいということで、手を打つことにした。

とはいっても、言葉で伝える方法では、時とともに記憶は薄れ、やがて言葉は消えていく。しかも、言葉の伝達は、あくまで話し手が主体で、聞き手は受け身。児童が主体的に捉えるいい手はないものかと思案した。

手法は、下の全景写真のとおり。

◆校門階段上方

◆児童昇降口横

お分かりだろうか？　石板彫刻文字の再塗装である。

◆校門階段上方(平成５年以来　27 年ぶり)

◆児童昇降口横(昭和 47 年以降　初塗装)

　校内石板の再塗装は、これが初めてではない。
正門の校名と西門の校名の再塗装を行っている。

　手前味噌になるが、納得のいく出来であると
ともに、学校の顔が引き締まったように思えた。

　つまり、【はげんだ】成果が見えたのだ。

　すると、次は何をやろうかと考える。
そう。　次を【求めた】わけだ。
気付かぬうちに【求めて　はげむ】。これである。

　そして、次は何をやろうかと、新たな思案中。

　さて、子どもたちは、どうとらえただろうか。
しばらく、そっと見守ろう。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年９月２５日(金)号

◇ 校歴を紐解く❶　【常磐東小学校　校歌】

体育・運動発表会に向けた競技・演技の練習が始まった。児童が健気に頑張る姿は、見ていて本当に微笑ましい。低学年の児童は自分の体よりも大きい「大玉」を 3 人で協力して押し転がす。児童は、前方がよく見えないのだろうけれども、大玉を巧みにコントロールし、目標の旗の周りをぐるりと回している。よく見れば、旗を支えている教師がさりげなく支援している。流石だなあと感心する。

さて、児童昇降口前のピロティ―に校歌の石碑がある。石碑に刻印された表記が「校歌」ではなく、「常磐東小学校の歌」とあるところが優しく、趣深い。
歌詞の１番の一節には 「歌えよ心も　はればれと」。 児童が歌に親しみ、声高らかに歌唱できるようにとの思いが込められたのではないかと思われる。
石板の刻印によれば、石碑の設立は昭和 39 年 3 月。校歌創設にかかわった当時の多くの方の思いと願いが伝わってくるようだ。

一転して、２番の歌詞には力強さがある。
「腕組む影さえ輝いて　常磐東の学び舎に　正しく鍛える身と心」。
身体と心（精神）を愚直に鍛えれば、「表情のない黒い影さえ輝く」という喩えだ。特に気に入っているのは、「鍛える」という表現。「養う」や「培う」、「育てる」といった語彙に比べ、はるかに力強さがある。そして、ここには覚悟がある。

続く３番の歌詞には、こうある。
「日本の明日を担う夢　僕も私も　もっている　仰げよ明るい虹の橋」
「夢と希望を忘れずに上を向いて歩いてゆこう、空にかかる虹のように」と未来や将来に向けての励ましで締めくくっている。このように実にいい歌詞なのだ。

資料によれば、本校の校歌（学校の歌）は、昭和 37 年の創立 60 周年を機に動き出し、38 年１月に制定、周年から 3 年越しの 39 年 3 月に 60 周年記念式典の目玉として安戸町の旧校舎正面玄関横に石碑が建立されたとある。
昭和 39 年といえば、東京オリンピックの開催年。まさに日本が一丸となって世界に向けて大きく動き出した時。日本が一番勢いのあった頃だ。
【腕組む影さえ輝いて】【鍛えよ身と心】【日本の明日を担う夢】　なるほど。
これらの歌詞は五輪とリンクし、当時の時代背景が読み解ける。

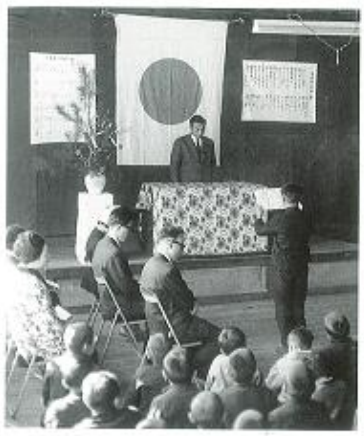
【鍛えよ身と心】。児童自らが己を鍛えるための支援が我々に課せられた使命だ。その鍵は、校訓【求めてはげむ】であり、手法は【あたり前のことを あたり前に】と捉えた。【あたり前のことを あたり前にできるように 求めてはげむ】のである。

◆創立 100 周年記念誌【緑陰】より

◀鼓笛隊編成（昭和37年）

創立60周年
記念式典挙行
昭和39年3月

原田　市郎 校長
昭和36年4月～昭和40年3月



◀校歌誕生（昭和38年1月28日）

▲歌碑建立（昭和39年）

◆現在の校歌碑（裏面）　※児童昇降口前のピロティー（体育館前）

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年９月２９日(火)号

◇ 校歴を紐解く❷　【常磐東小学校　校歌】

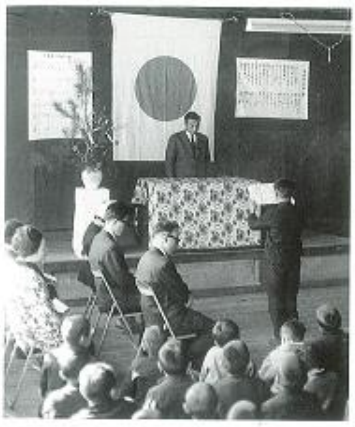
資料によれば、本校の校歌は、昭和 37 年の創立 60 周年を機に動き出し、昭和 38 年 1 月に制定（発表）、周年から 3 年越しの昭和 39 年 3 月に 60 周年記念式典の目玉として安戸町の旧校舎正面玄関横に石碑が建立された。

下の資料写真は当時のもの。現在も 4 年生から 6 年生が担う鼓笛隊は、昭和 37 年に編成されたとある。よく見ると、児童の服装は制服に通称「トレパン」、黄色の安全帽子である。昭和 40 年代に入ると私服に移行するが、昭和 30 年代末までは本校は制服があり、この数年前までは男子も学帽をかぶっていた記録が残る。
演奏楽器に「アコーディオン」と「ベルリラ（縦型の鉄琴）」が確認できる。編成隊の最大人数は「縦笛」である。時代を経て、「アコーディオン」は「鍵盤ハーモニカ（通称：ピアニカ）」、さらには「ハーモニー キーボード」へと変わっていくのである。

校歌碑建立時の作業時は滑車が見える。重機は貴重な時代だったことがうかがえる。校歌碑の材質は御影石。歌詞等の彫刻文字は、当時は珍しい文字彩色が施されており、白色の輝きがまぶしい。校長をはじめとする関係者の校歌に対する思い入れの強さがうかがい取れる。

◆創立 100 周年記念誌【緑陰（平成 13 年 11 月発刊）】より

◀鼓笛隊編成（昭和37年）



◀校歌誕生（昭和38年1月28日）

▲歌碑建立（昭和39年）

◆現在の校歌碑　※児童昇降口前のピロティ―（体育館前）

常磐東小学校の歌（校歌）

作詞：中林きみを
作曲：馬飼野　昇

※塗装前の黒文字 VER

　自分が目にした文字色は、記念誌に残る「白色」とは異なる「黒色」の文字。後に分かったことであるが、経年により色が薄くなった文字を、平成 23 年に三浦倫夫（第 27 代校長）先生が分かりやすいようにと黒で彩色されている。
　創立 120 年を節目とし、今回、建立時の白の文字色で改めて彩色を施した。

　手を入れて改めて分かったことがいくつかある。
❶石表面の状態
・碑の建立から半世紀以上になるが、洗浄すると鏡面が姿を現した。粒子の細かい良質の御影石を用い、高い技量を備えた職人が丁寧に仕上げたことが分かる。腕もよいが、素材がいいから時を経ても崩れがないといえる。
❷2 番の歌詞
・「腕くむかげさへ　かがやいて」旧送り仮名が使われている。体育館に掲示されている書家 鈴木紫龍 先生の書も同様であった。今後であるが、原書に敬意を払いつつも、子供たちが日常で使用する「腕くむかげさえ」で対応していくことにする。
❸歌詞の上部に位置する「校章」
・反転させて縁取りを付け、「東」を引き立たせる工夫が施してある。立体感が生まれ、格式を高めている。
❹最後に文字。
・のびやかで丸みがあり、実にいい文字である。行書のよさを生かした流れがある。この文字をよく石に刻んだものだと、職人の腕に感服である。

　少しずつ手を加えてきた環境整備であるが、10 月はいよいよ仕上げとなる。体育館につながる渡り廊下の屋根は、校務員の山田さんが再塗装に向けて準備中である。塗装のはがれかけたクリーム色の屋根が何色に変わるか期待してほしい。
　そして、最終仕上げは校門の再塗装。緑に囲まれた中にそびえる白亜の校舎の白亜の新生正門。　イメージは、膨らむばかり。　「山鳩群れ飛ぶ　風の中」

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年１０月９日(金)号

◇ 校歴を紐解く❸　【校舎全景】

さわやかな風を感じつつ、黄色が混じり始めた山緑を目にし、五感で秋を感じる常磐東の１０月。後半戦・後期の始まりである。後期のスタートは全校体育。子供たちが溌溂と輝いた詳細は、教頭が執筆する「学校だより」で紹介する。

さて、後半戦の「こうき」。「こうき」は「後期」であり、「好機」。全校体育で子供たちが大活躍したように、後期は「子供たちが我々の予想をはるかに超えて伸びる好機」なのである。子供たちの心身の健やかな成長を支えるべく、後期の始まりを節目として、我々も「求めて　はげむ」所存である。

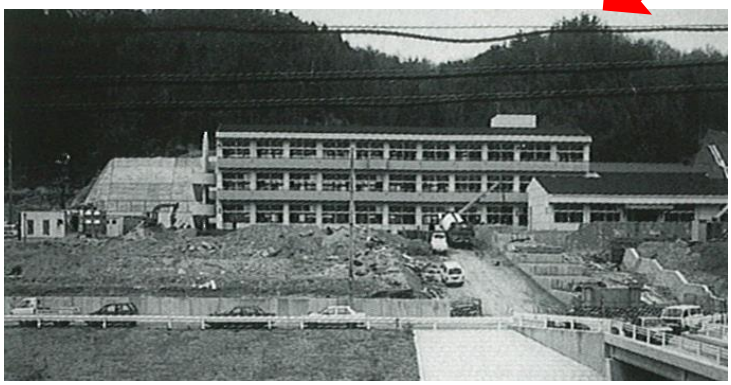
創立 120 年を節目としたシリーズ「校歴を紐解く　その３」は、「写真で比較する校舎全景」とした。分かりやすくするために、用紙サイズをＡ３版とした。児童たちも、ぜひ見て楽しんでもらいたい。

◆まずは下の写真から。

・赤色の矢印➡で示す山が同じであることから察するに、常磐東小学校は平原ではなく、山を切り開いた地に建造されたことが分かる。

・建造時の青木川堤防法面のコンクリートは、建造直後で真っ白である。

〇建造時の全景



〇現在

◆次は視点を変えて、この写真。　青木川原の写真である。

・右の学校建設当時の（昭和 61 年ごろ）写真をよく見ると、重機が確認できる。

青木川の川幅も狭い。

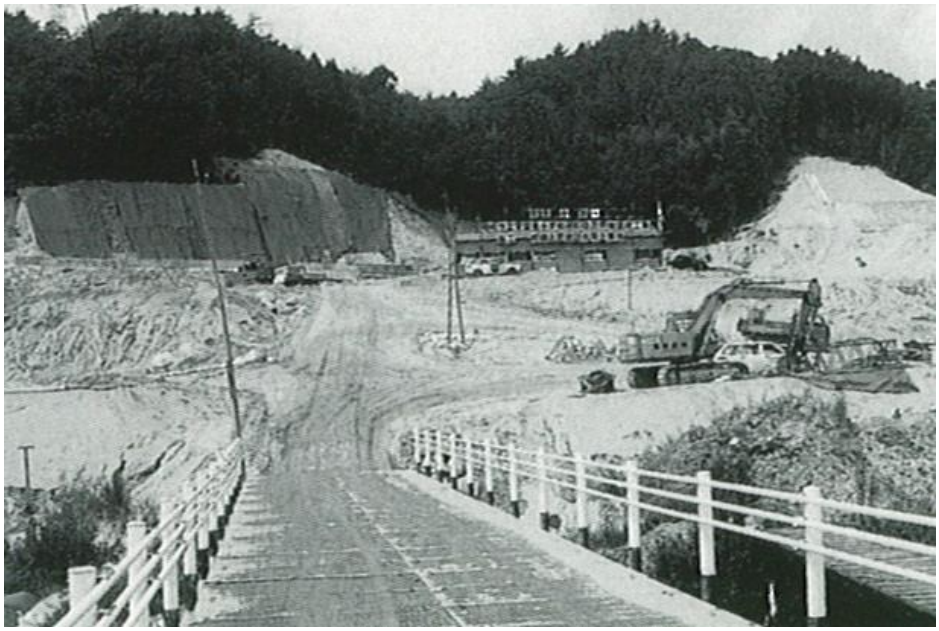
学校建設と並行して、河川整備も行われていたことが分かる。

・右が現在の写真。

最も異なるのが、山に架かる「第２東名青木橋」の存在である。

別資料によれば、橋の開通式は平成２１年（西暦 2009）に行われており、現在本校に在籍する子どもたちは、橋の工事を知らない世代となる。

◆校舎建設時（整地工事）の写真。



・敷地内整地に加えて、裏山（常東ランド）の工事も行っていたことが分かる。

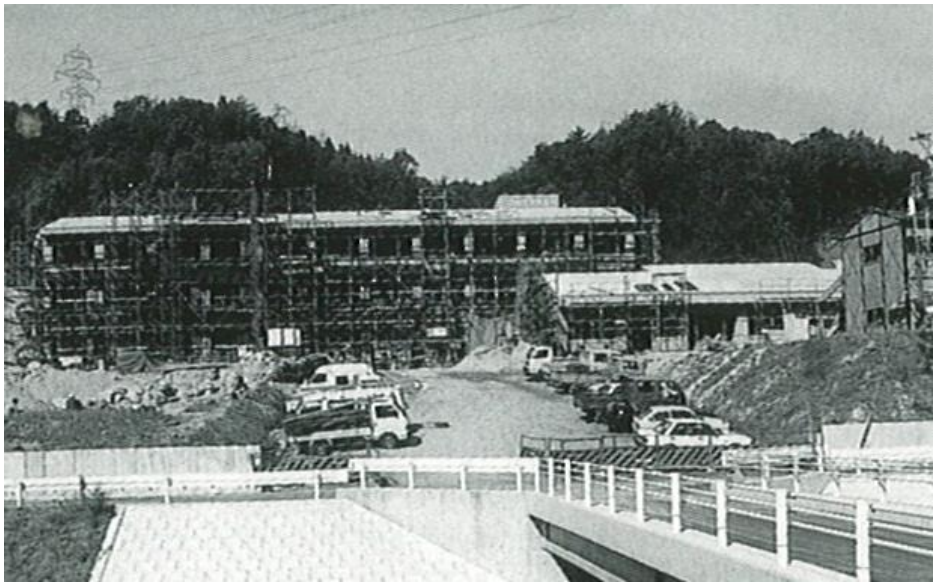
さらに、学校前の道路もないことから、並行して行われた。

他校の学校建設と比較すると、かなり大がかりな工事である。

・左の写真が現在。

米山橋（よねやまはし・S61.3 竣工）の欄干の形状は工事時と同じであるが、下部の基礎の形状は異なる。同時期の並行工事であること分かる。

◆整地工事から校舎建設工事へ



・山を切り拓いて整地しつつも、橋よりも高い位置に校舎を建設したのは、水災害予防対策であることが予想される。

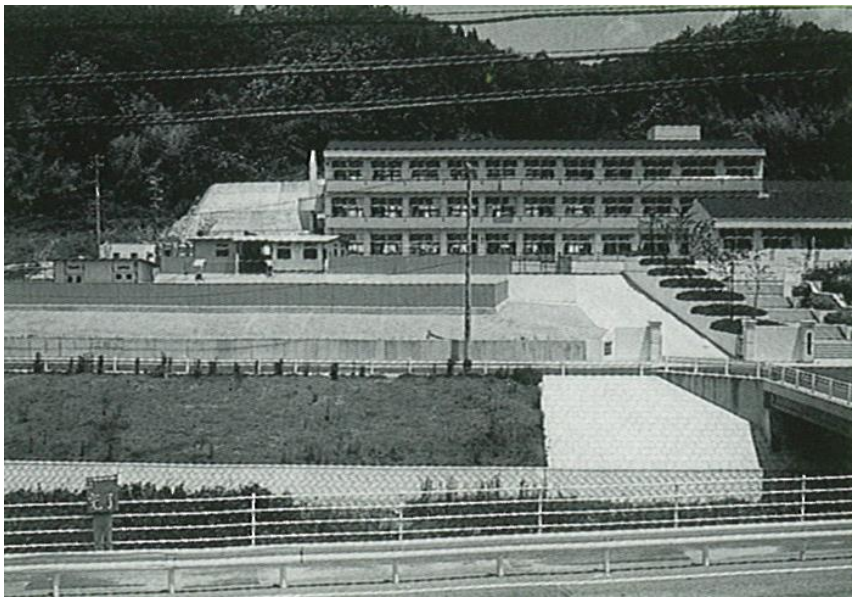
この時期になると米山橋の基礎の部分が現在と同じ形状である。

◆新校舎完成（昭和 62 年）

・校舎の完成は昭和 62 年。
まさに、
緑濃き山中に建つ
「白亜の校舎」
である。

無機質に見えるのは、校内の緑がないためであろう。

ここから緑化活動が始まり、「緑化日本一の学校」の歴史が始まるのである。

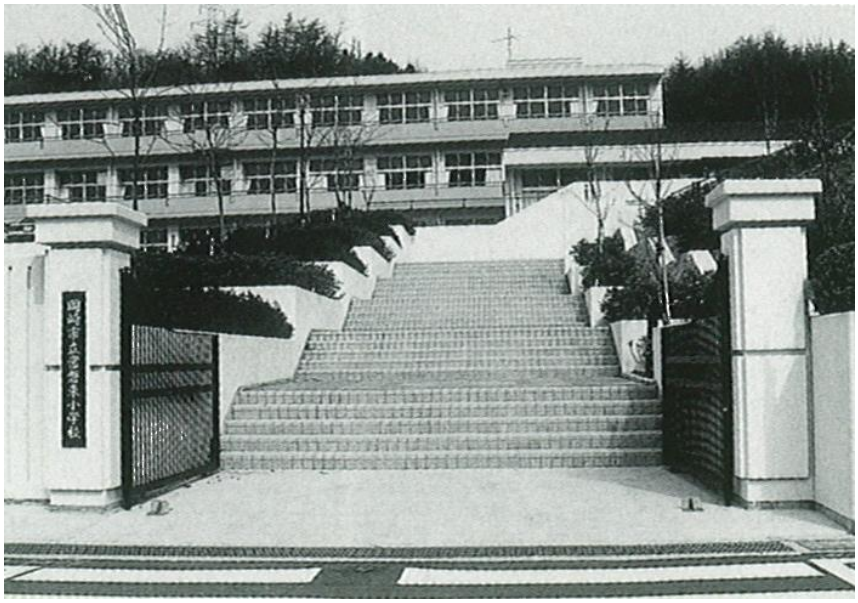


・校門前から見ると、校内を巡る【白壁】がまぶしい。

白壁と坂は、まるで「ギリシャ」のようである。

桜階段の「ソメイヨシノ」と対する「ハクモクレン」の幹が、細々としている。

横断歩道の白線もくっきり。



◆現在の校門付近

・樹木の生長が、時を重ねたことをあらわしている。

・校門は、高圧洗浄機による洗浄により、本年度スタート時よりもきれいになった。とはいうものの、経年劣化による傷みとコケの沈着により、白壁の黒ずみが残る。

後期 10 月、
さあ新生工事開始！